

# 言語力検定

## 第1回言語力検定の結果報告

読み、書き、考え、伝える力

財団法人文字・活字文化推進機構は、昨年秋に第1回言語力検定を実施し、全国で約1万人の受検者が、日本で初めてのPISA型読解力の検定に挑戦しました。日本の教育界に激震が走った2003年、2006年のPISAでは、日本の生徒の結果が毎回下がり、また、OECDの平均15%よりも高い無答率25%、白紙回答の多さが注目を集めました。

今回の検定結果では、PISAほど顕著な無答率は見られませんでした。今回の結果の特徴は部分正答、つまり論理的に表現する力があと一步、という回答が多かったことです。

専門家による結果の評価など、詳細については以下、ご参照下さい。

【主催者を代表して 財団法人文字・活字文化推進機構会長・福原義春（資生堂名誉会長）】

言語力検定は、新聞やテレビでも取り上げられ、大きな反響がありました。その理由は、新学習指導要領の「言語活動の充実」という教育指針を先取りしていることや、言語力を測定するモデルとして最先端の国際調査で使われた読解力テストを参考にしているからです。入社試験や高校・大学の入試も、暗記力や知識量を測るだけではなく、知識や技能の活用を重視する問題が出題される傾向にあります。この活用力は、ひろく深い読書によって養われます。

現場の先生方からは「言語力検定で出題された課題文や設問を、授業の指導指針として利用させてほしい」というご意見もたくさん頂戴しています。ご自由に活用いただければ光栄に存じます。

【実施概要】

第1回言語力検定は、3・4級（中学・高校生レベル）が平成21年10月～11月に全国で実施されました。受検者数は小学生から社会人まで合計9,984名。3級合格者数は2,167名（全受検者の21.7%）、4級は1,385名（13.9%）、不合格者が6,432名（64%）でした。

受検者には、正答率に基づく偏差値と合否判定、解答分野別の成績と全体平均とが比較できるデータに加え、自分の弱点を克服するための文章の読み方などのアドバイスを提供しています。各学校・団体には受検者の個別の成績のほか、団体平均と比較できる平均値のほか、読書指導や言語力向上のための指導のポイントを提供しています。

【合格基準と平均正答率】

第1回言語力検定の平均総合正答率は63.1%でした。級判定、合格基準は次のとおりです。

3級	正答率76%以上
4級	正答率68%以上、76%未満
不合格	正答率68%未満

【設問はPISA型読解力】

この検定は、学校教育や社会生活で必要とされる「読む・書く・考える・伝える」という言語の力を、どの程度身につけているかを測り、読解力や言語力の向上を目的としています。

設問は、OECD（経済開発協力機構）のPISA（生徒の学習到達度調査）の読解力測定をモデルに、日本の言語文化を尊重しつつ、選択式問題と記述式問題で構成しています。課題文は文学的文章、科学的文章、社会的・公的文章の3分野から、実生活で身のまわりにある新聞などから出題しました。それぞれの問題では①課題文を読み取り、情報を正確に取り出す力、②筆者の意図、主題、登場人物の行動、背景を推論する力、③文章、図表、グラフなどをよく読んだ上で熟考・評価する力を測定し、自由記述問題では④課題文にある根拠に基づき、論理的に意見を表現する力を測定しています。

また、漢字や熟語、文法などの個別事項は測定せず、読解力に焦点をあてた問題に限定しています。

### 【専門家の見方】

今回の結果を読解力に関わる有識者に評価をしていただきました。

#### 無答率はPISAほど高くなかった

PISAの記述問題の白紙回答、無答率が高かったのに対し、今検定の最も高い無答率の問題でも7%と比較的低めだった。（2006年調査では無答率が約25%）それは①受検した学校の言語力、読解力に対する関心が高い、②学校で受検しているという環境の影響、があるかもしれないが、③自由に書く、自分の意見を述べる、ということを経験してきた成果と言えるかもしれない。

#### 記述問題の結果が示唆する課題

一方で、記述問題では「課題文を繰り返しているだけ」、「文中の根拠を具体的に示していない」など完全正答の一步前の部分正答の比率が高い。今回の問題自体はPISA型の問題として決して難しいものとは言えないし、使われている課題文も難易度のレベルとしても高いとは言えない割には、正答率、合格者比率とも低いと言わざるを得ない。つまり自分の考えを的確に、論理的に述べる・書くことについてはまだ課題がある、総合的な読解力の育成はまだ必要であることが示唆されている。

#### 「国語の成績と一致しない」ケースについて

このようなテストにおいて、正確に読めることが基盤であることは従来の国語と同じであり、従来の国語が出来れば、言語力検定の問題でもある程度は出来るはずである。ただ、書かれている情報に基づいて推論を積み重ねて、自分の意見に結び付けて形成していく、という部分については訓練していない子どもは戸惑ったに違いない。

従来の国語の出来る子どもでも、検定の成績が必ずしもよくない、という例もあったようだが、そういう理由に起因していると考えられる。

しかし、あくまでも基盤となる力は正確に読むことであり、従来の国語と変わらない。

### 【受検した学校、学習塾の日頃の取組】

全受検団体（学校及び学習塾）に実施したアンケートでは、「文章を読んで、自分が思ったことや考えたことについて、意見を言うようにしている」（受検団体の55%）、「文章を読んで、自分が思ったことや考え得たことについて、意見を書くようにさせている」（62%）、「作者や筆者が一番言いたいことが何か、話し合うようにさせている」（40%）など、読解力の向上に結びつく取組の実施状況が明らかになっています。さらに「新聞、パンフレット、インターネットなど多様な資料を学習材として取り上げている」（45%）、「読み聞かせや読書会など、読書への興味・意欲を育てる活動を継続的に行っている」（42%）、などの読書教育を重視している

こともわかります。

一方、「読んで感じたことをグループで話し合うようにさせる」（同アンケート26%）、「作者の意見に賛成かどうかを話し合うようにさせる」（29%）、「作者の言いたいことや登場人物の行動を評価し、どこに問題があるか、自分だったらどうするかを話し合わせる」（22%）などの実施率が相対的に低いという集計結果となっています。これらの取組が「解釈」、「熟考・評価」の力をさらに育てる完全正答への鍵の一つと考えられます。

### 【言語力検定を実施して一先生方の声】

受検いただいた学校の先生の声の一部を紹介します。

- ◆ 筆記が苦手な子は少しも文章が書けないので、学校として読む力、書く力を重視する対策を検討していたところ、ちょうどよいタイミングだった。
- ◆ 表現力、本質的な国語力を伸ばす対策、大学入試の論文対策が必要な状況だが、これまでになかった表現力を問う検定として良い機会だった。
- ◆ 生徒の得意な分野、不得意な分野が数値で表されているのがよかった。
- ◆ 生徒間の比較ができることが分かりやすかった。
- ◆ 普段の国語の成績が良い生徒が不合格だったり、まだまだ能力不足だと思う生徒が3級に合格していたので、意外だった。
- ◆ 検定の結果は内部推薦に反映させる。
- ◆ 結果は個別指導、今後の授業の全体的な指導材料として活用していきたい。

### 【第2回言語力検定】

第2回言語力検定は平成22年9月25日から10月24日に実施します。申込は平成22年6月1日より8月13日まで、10名以上の団体で。3・4級（中学・高校生レベル）に加え、5・6級（小学校3～6年生レベル）を実施します。受検料は3・4級一人3,000円、5・6級一人2,000円。詳細はホームページをご覧ください。

### 【新教材】

第2回言語力検定より5・6級（小学校3～6年生レベル）を実施するにあたり、教材『言語力検定5・6級公式テキスト』を発刊しました。

編著者：(財)文字・活字文化推進機構編著、有元秀文・北川達夫著

発行：(株)日本能率協会マネジメントセンター

判型：B5判・並製

頁数：本文160頁

定価：1,260円（税込）

ISBN：978-4-8207-4635-5

### 【お問い合わせ】

財団法人文字・活字文化推進機構

電話番号

03-3511-7305

メールアドレス

info@gengoryoku.jp

公式ホームページ

www.gengoryoku.jp

【補足データ】

団体種別の合格者数と平均正答率 表

団体種別	人数	平均正答率	3級合格者数	4級合格者数	不合格者数
中学校	3,649	59.0%	513	730	2,406
高等学校	4,432	65.6%	1,168	140	3,124
大学	227	69.5%	81	73	73
専門学校	937	63.9%	216	243	478
塾	474	62.6%	83	123	268
社会人、他	265	70.4%	106	76	83
合計	9,984	63.1%	2,167	1,385	6,432